Another Days

第2話
【My Lonely Town】

Aymic

★　はじめに。　【Another Days】について。　★

【ザ・シムズ 3】とは、仮想世界に住む人間（シム）を操作し、もう一つの日常生活をシミュレーションして楽しむと言う、2009年6月4日に発売された人生シミュレーションゲームです。
　【ザ・シムズ】シリーズの第3作目にあたり、開発元はElectronic Arts(エレクトロニック・アーツ)です。　（※ Wikipedia等、参照。）

◆　この【Another Days】の作品および物語に関わる物は全て、作者個人があくまでも個人的に作成・設定した上でプレイしている物を元に作成した物であり、公式とは一切関係がありません。

◆　【Another Days】は、当作品作成者であるAymicが個人的にプレイしているプレイデータを元に、その【ザ・シムズ3】のゲーム世界観を、作成者独自の視点でオリジナルストーリー化した物です。

◆　この物語のメイン舞台には、【Hidden Springs (ヒドゥン・スプリングズ)】の街データセットを使用しています。　基本的に、実際のゲーム中にあるそれらを使用、またはその名称を表記していますが、一部当方オリジナルの設定や建造物に名称、さらに公式ページを介した共有アイテム等も含む事があります。
　物語によっては、各場所が予告無く移動変更して登場する場合があります。　また物語の展開によっては、他の街データセットを使用する事もあります。

◆　お話に登場する人物（シム）達は、私自身がオリジナルで作成した者と、最初から各街データセット中にあらかじめ住人として作成され、配置されている者（既存シム）がおります。
　作品中で登場する彼らは、元から設定されていた特質（性格のような物）を参考にした上で、私Aymicが物語を作成する際に奥行きや味わいを出させたいという考えから、 各シム達には私独自のキャラクター性を設定し、付けさせて頂いております。

◆　【Another Days】の物語では、実際のゲーム上の世界観（システム）にのっとり、各シム達は性別に関係なく恋愛関係を構築させております。

◆　予告無く、作品中に登場するオブジェクト等が変更する可能性もあります。

以上の事をあらかじめご了承の上、どうか何とぞご理解頂きますよう、お願い致します。

★　今作品の主な登場人物　★

■ カイル・レナーバック（主人公）／若年（20代）■

慈愛心溢れ、穏やかで優しい性格の人物。その上明晰な頭脳をも持つ、超インテリ青年です。
現在は、街一番の大病院に籍を置く第一線の外科医として活躍中。
過去には料理人としてのキャリアも積んでおり、高い知性に裏打ちされた多彩な才能の持ち主
。
突っ走りがちなユージンの、頼れるスマート・ブレーキングシステム役でもあるパートナー。

■ ユージン・ラストン （主人公）／若年（20代）■

　裏表の無い性格で、どこかしらに少年っぽさを残す、やんちゃで奔放な熱血漢の青年です。
　趣味である、釣りの腕前は玄人レベル。職業は警察キャリア、国際的スーパースパイ（特別捜査官）。
　主に、潜入捜査を専門とする“スーパーエージェント”の一人として、日々の平和維持に貢献。
　おっとり癒し系なカイルとは正反対の、アクセル全開で元気一杯な彼のパートナー。

■ ハリー・カースティン／若年（20代） ■

ユージンのハイスクール時代の同級生で、親（悪）友。
ジャーナリズムの世界に飛び込み、カメラとペンを手に、フリーのカメラマン兼ジャーナリストとして活躍中。

■ ロニー・ハーディング／若年（20代） ■

大都市ブリッジ・ポート出身。　ハリーのパートナー。
奇才のスタイリストと称され、世界を股に活躍する、ショービズ界の第一人者。
現在はヒドゥン･スプリングズに移住し、更なる躍進を続ける【オネェ青年】です。

カイル：「用意できたかい？　ユージン」

ユージン：「おう、バッチリだぜ！」

カイル：「今、メール来てさ。　今日の夕飯、家食べにするか外食にするか、考えといてくれって」

ユージン：「お。　どっちも捨て難いな、そりゃ」

ユージン：「たまの外食も悪くないんだよな～。　でも、家で気兼ねなく好き勝手やって盛り上がるのも捨て難いし…。　う～ん、どうすりゃイイもんか…」

カイル：「何とも、ゼータクな悩みだねぇ」

ユージン：「ってかさ。　アイツ、今日1日フリーって話なのか？　俺的には、あーいう仕事は常に忙しくしてるみたいなイメージなんだけど」

カイル：「さぁ…？　僕も、ああ言う業界の事はさっぱり」

カイル：「まぁ、本人がそう言って来てんだから、そう言う事なんじゃない。　もし、今言ったような生活そのまんまだとしたら、貴重な休日を僕らと共有しようと思ってくれたなんて、凄く嬉しい事だよね」

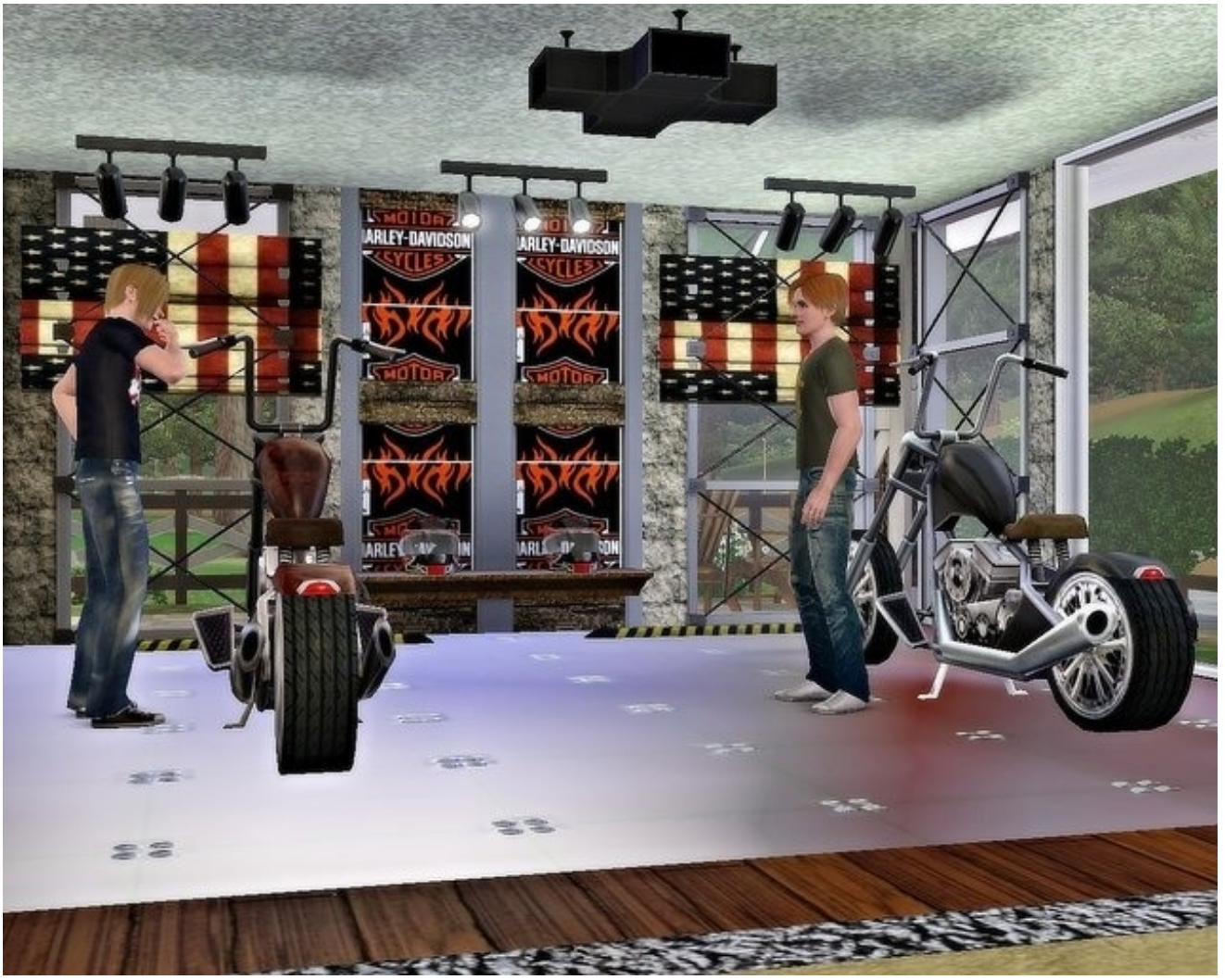
ユージン：「だな！　これぞ、友達冥利に尽きるってカンジだぜ」

ユージン：「そりゃそうと。　今日のこのメシ会の招待状っつって、わざわざ手書きでポストカードを送り付けて来たのにゃ参ったぜ！　しかも、やっぱりってかお約束通りつーかの、メッチャおシャレなカードで。　思わず手ェ震えちまったぜ」

カイル：「ああ、アレね。　僕も見た時、一瞬何事かと思ったよ」

カイル：「けど、そうやって人をアッと言わせるような感性や演出センスみたいのは、さすがショービズ界に生きる一流のスタイリストだなって思ったね。　そんなリアクションする僕らの姿さえ、ひょっとすると計算ずくの演出だったかもよ？」

ユージン：「うお、ちょっとソレッ！　うっは～、マジでカッケぇ～!!」



カイル：「とにかく、ロニーに会うのは久しぶりだよね。　ハリーとは、先日電話で話したけど。　その時の話じゃ、相変わらずだみたいな事言ってたよ」

ユージン：「ふ～ん。　エラそーな事言いやがって、あのヤロー」

ユージン：「アイツ、ぜってーロニーの尻に敷かれてるぜ。　だってよ、片や有名人のセレブスターだぜぇ？　それが、何であんなハリーごときがデカイ面できるっつーよ**!?**　　そもそも、アイツはだな。　学生の頃にゃ**...**」

カイル：「出た！　ハリーの裏情報、最新版！」

『前略、カイル君、ユージン。　久しぶり☆　元気だった？』

『ご無沙汰しちゃってて、本当にご免なさいね。
ここの所、外用が重なっちゃって。

おかげで、ようやく一段落着いたって所。

と言っても、来月予定してるショーの本番近くには、
また忙しくなるけど。』

『セッションやら何だで、
先月からブリッジ・ポートとスターライト・ショアを
行ったり来たりの毎日でね。

これを書いてる今は、ブリッジ･ポートに滞在中。

明日にはやっと、
ヒドゥン・スプリングズに帰って来る予定でいるわ。』

『外に出る度いつも思うけど、
やっぱりヒドゥン・スプリングズが一番ね。

知っての通り、私は生まれも育ちもブリッジ・ポートだけど
今じゃそっちの街が私の帰る場所と言うか、
故郷だと思ってるのよ。』

『何たって、そっちに帰れば皆に会えるし！

現実には忙しかったりで、
なかなか顔を見られない日も少なくないけど
私、皆の事を考えない日は一日も無いの。

もちろん、カイル君とユージンの事もね。』

『カイル君、元気でやってた？
何かと皆に頼られちゃうカイル君の事だから、
色々忙しくしてたんじゃない？』

『ユージンも相変わらずかしら？
お仕事に遊びにと大暴れしてる姿が、
早くも目に映るようよ。』

『そんな訳で。
そっちに着いたら改めてメールするから、
2人共ぜひ家に遊びに来て。
良かったら、久々に皆でお食事会なんてどうかしら？
ハリーも、ここぞと張り切るはずよ。

我が家のバラも、そろそろ満開になる時期。
2人が来てくれる日には、
最高の色と香りで歓迎させて頂くわね。』

ユージン：「一相変わらず、スゲー家…」

カイル：「だね」

ユージン：「同じ野郎世帯だってのに。　住む人間変わりゃ、こうも違うモンかねぇ」

カイル：「まったく」

ユージン：「あーもうッ、この上品な噴水！　モダンな大邸宅!!　窓越しに見えるバラの花!!!　どいつもこいつも、ハリーに似合わな過ぎッ!!!」

カイル：「はいはいソコ、ヒガミ入り過ぎ」

ロニー：「いらっしゃい**2**人共！　待ってたわよぉ～。　久しぶりね、カイル君！　会えて嬉しいわぁ♪」

カイル：「やぁ、ロニー！　久しぶり」

ロニー：「ユージンも！　相変わらず元気そうね。　安心したわ」

ユージン：「おうよ！　俺は、いつでも全開**Max**だぜ☆」

カイル：「カードありがとう。　このメールの時代にあんな手書き物もらって、凄い感動しちゃったよ！　やっぱさすがだなって、ユージンとも話してたんだ」

ロニー：「あらそう？　ウフフ♪　たまには、あんなのもイイでしょ？」

ユージン：「ハリーはいるのか？」

ロニー：「もっちろん！　もう、昨夜からソワソワしちゃって。　立ったり座ったりと、ま一忙しいもんよ」

ロニー：「ささ！　立ち話はこのくらいにして、入って入って♪　今日は、凄い楽しみにしてたんだから。　ゆっくりしてってちょうだいね」

カイル：「ありがとう。　じゃ、さっそくお言葉に甘えて」

ユージン：「んじゃ、お邪魔～☆」

ロニー：「お待たせ。　お待ちかねのお客様のご到着よ！」

ハリー：「おおー♪　久しぶりィ☆　待ってたぜ!!」

ハリー：「元気そうじゃん、カイル。　あれから、変わりねぇみてぇだな」

カイル：「そっちこそ！　この前は、電話ありがとね」

ハリー：「…で？　チミは、どっから湧いたクソガキかな？」

ユージン：「一発殴らにゃ、思い出せねーってか」

ユージン：「久々に会った第一声がソレかぁ？　エラソーな口叩きやがって！　テメーごときがバラだの大邸宅だの、殺人級に似合わねーんだよ！　現行犯でブチ込むぞ、クソッタレ**!!**」

ハリー：「ぁあ**!?**　そっちこそ人様の家ン中で吠え散らしやがって、この狂犬ポリス**!!**　無駄吠えしてっと、明日の朝刊トップに実名と顔付きでデカデカと載せっぞ、コラア**!!**」

ロニー：「そう、コレコレっ！　**2**人揃ったらこう来なくちゃね。　ヒドゥン･スプリングズに帰って来たって実感するわ〜**!!**」

ハリー：「ま、特別にビールくらいは舐めさせてやるさ。　言っとっけど、本物だからな。　第3とかじゃないんで。　知ってる？　本物のビール」

ユージン：「あー、ちょっと自信ねぇな。　ウチは毎日ドンペリなんで」

ロニー：（今日の為に、ブリッジ・ポートで最高のヤツ買って来いって、私に頼んでたクセに）←※心の声

カイル：「毎日ドンペリねぇ…。　その割に、僕は飲んだ憶えは無いなぁ。　その代わり、何やら誰かと楽しく酒を交わしてるらしき夢を見てる人の寝言は、つい先日聞きはしたけど」

ユージン：「え？」

カイル：「いつ、僕の名前を呼んでくれるかって期待してたけど、結局最後まで呼ばれなかったし。　黙ってたけど内心、メッチャショックだったんだけど」

ユージン：「そ、...そうなん？」

カイル：「でもま、今日これから現実に酒を交わせば、そんな夢ももう見なくなるだろうし？
そう思えば、僕としちゃハリー様々だね。　そっちも正夢になる、こっちもモヤモヤが解消されるしで一石三鳥。　こんな、嬉しいハナシは無いねぇ♪」

ユージン：「うーん…」

カイル：「だから、今日はガッツリ飲ませてもらえって事!!　じゃなきゃ、コッチの気も済まないの！　これで、またあんな寝言言って来たりしたら。　次は、詫び入れてもらうからな！」

ハリー：「っしゃあ！　今日は覚悟しやがれよ、テメー!!」

（相変わらず、ご苦労様と言うか…。　やっぱり、さすがね！　カイル君）

（夢の話が、本当かどうか知らないけど。　話の腰を折らずに、どっちの顔も立てつつ場を盛り上げる術があると、本当助かるわね。　つくづくありがたい存在だわ）

ユージン：「んじゃ、今日はヨロシク！」

ハリー：「おう、任せとけ！」

ロニー：「で、食べる方は？　家？　それとも…」

ハリー：「お、そうそう。　どうする？」

ユージン：「どっちも捨て難かったけど、久々に水入らずで盛り上がりたいし、迷惑でなきゃ家でどうかと」

ハリー：「よっしゃ、ソッチも任せろ！　バーベキューでもビュッフェでも、ドドンと来やがれ!!」

ユージン：「キャー♪　ハリーくん、素敵ィイ☆」

ハリー：「**…**そんな訳で、カイル様！　大変申し訳ありませんが、グリル役及び料理の方、担当してもらっても宜しいでしょうか？　本来ならホスト側がやるべきだけど、料理スキルの低い俺らじゃ、せっかくの美味い肉も台無しにしちまいそうなもんで**…**」

カイル：「**OK**！」

ユージン：「何だよ、ダッセーな！」

ロニー：「本当にゴメンなさいね。　カッコつけてみた所で、せいぜいこういう手段に出るのがオチよ**…**」

ハリー：「なぁ。　ホンっとマジであんた、うちの専属ケータラー（出張料理人）になってくんねぇ？　ちゃんと金払うからさぁ」

カイル：「じゃ、代わりに受け持ちの患者さん達の診察と治療を頼めるかい？」

ユージン：「…しっかも、ズーズーしいと来てやがる」

ロニー：「ジャーナリストより、悪徳セールスマンに向いてるかもね」

ロニー：「それじゃ、私からも悪いけど。　協力してもらってもいいかしら？」

ユージン：「おう！」

「こっちよ。　**1F**になるんだけど**...**」

ロニー：「今日の為に、ブリッジ・ポートで買って来たワインがあるの。　向こうにいた当時、行きつけだったお店の自慢の銘柄でね。　口に合うか分からないけど、ぜひご馳走したいと思って」

ユージン：「マジで**!?**　うっは、スッゲェ**!!**」

ロニー：「他にも。　気になるのがあったら、どうぞ」

ユージン：「うわー。　そう言われっと、かえって目移りするなー」

ユージン：「な、この写真って…」

ロニー：「え？」

ロニー：「ああ、それね。　まぁ、私にとっての一種の願掛けみたいな物とでも言うのかしら。
　スライドビューの中に、１人で写ってる男の人がいたでしょ。　その人、私の兄なのよ」

ユージン：「マジ**!?**」

ロニー：「オリヴァー・ハーディングって言うの。　私の**5**歳上で、軍事キャリア。　今は赴任先のサンリット・タイズの街で、トップガンとして活躍してるわ。　言っとくけど、私を見て連想しちゃダメよ？　兄さんは私と違って、凄く男らしい人なんだから」

「うちは、兄と私の男兄弟**2**人。　で、その**1**人がこんなオネェな訳で、と」

「父は、女の子が欲しかったそうよ。　そのせいか分からないけど、私がこんなんでも幸いあまり口出しする事が無かったわ。　私、小さい時から綺麗でカワイイ物が大好きでね。　遊ぶのも、いつも女の子と一緒。　なもんで、やっぱりお約束と言うかで…、周りからはいつもいじめられてたわ」

「けど、そんな私を見ては、いつも兄さんが助けてくれて。　私にとって、兄は真のヒーローその物だったわ」

「大きくなっても、私の美に対する憧れや探究心は変わらずで。　やがて、ついにはこれが自分の生きる道なんだって悟り、この世界に入ったの」

「私が、今こうして自由に自分を表現できるのは、親はもちろん兄さんのお陰。　**2**人のうちの**1**人が親の理想に叶う、立派な逞しい男として自立してるから。　もし兄と言う受け皿がなかったら、今こうした私は存在し得なかった。　だから私、一生兄さんには頭が上がらないの」

「だから。　だからこそ私は、この道を極めてやろうと誓ったの。　不祥の弟の分まで親の期待を背負った兄と、愚息を見捨てず、自由に生きる道を許してくれた親の為にも」

「必死だったわ。　いつの日か、私は必ず頂点に立ってやるんだって。　その為にはあらゆる努力、方法、それに人脈…。　トップに立つ為だと思えば、どんな事も苦じゃ無かった」

「そして、私はとうとうトップと呼ばれる地位を手に入れる事ができた。　だけど。　その後何が起こったかについては…ユージン、貴方も知っての通りよ」

「何故、私がこの街に来たのか。　それを機に、私の人生がどう変わって行ったのかを…、ね」

【　大都市　ブリッジ・ポート　】

ロニー：「向こうはもう、皆揃ってるの？」

ウィル・メイフェア（**MG**）：「はい。　もう、**9**割方は到着してると」

ロニー：「急いで！　私が遅れたとあっちゃ、シャレにならないわ」

クロード・ラーセン（アシスタント）：「はい！」

「ー…この私が遅れるとか。　そんなカッコ悪い事、あっちゃならないのよ」

ロニー：「**15**分以内で着けてちょうだい。　できるわね」

クロード：「は**...**、はい、何としてでも」

ウィル：「頼むぞ！」

ウィル：「ただ、この時間だと…。　タクシーの混む時間だからなぁ」

クロード：「そうですね。　市街地は裏道もありますけど、ブリッジに入るとさすがに…」

ロニー：「何言ってんの。　そんな事、言ってる場合じゃないでしょ」

ウィル：「うわ、やっぱりな」

ロニー：「あんなの抜けばいいでしょ。　こっちは急いでんのよ」

クロード：「でも、少なくとも**3**台は続いて**...**」

ロニー：「こっちの方が、トルク（瞬発加速）は遥かに上でしょうが！　対向車もいないんだから、さっさと抜きなさいよあんなの！　ただでさえ遅れてんのよ！　これ以上、私に恥掻かせるつもり**!?**　何の為に、あんたを雇ってると思ってんの**!!!**」

クロード：「す、すみません！」

「ーやればできるじゃない。　何、躊躇する必要がある訳？」

ロニー：「せっかく良い車乗ってんのに、こう言う時使わなくてどうすんのよ」

クロード：「…すみません」

ロニー：「田舎から、夢見て出て来たんでしょ。　周りの様子ばかり伺って、目の前にあるチャンスを大人しく逃すようじゃ、一生成功なんかしないわよ。　肝に銘じておく事ね」

クロード：「はい…」

“一当たり前だと思ってた。

私はトップ。

私のこの腕が、世界を動かしているんだと。
そんな私に全ての人達は憧れ、
必要としているんだと。

そう信じ、疑いなんて微塵も無かったわ”

“それらの確信は間違いなんだと気付くには、
その頃の私にはまだ時間が必要だった。
人の数だけ世界があり、
一人一人皆違う夢を抱いていると言う事。
自分一人だけで、世界が成り立ってるんじゃ無いと言う事。

…私は。
いつしか自信は自惚れに変わり
一番大切な物が見えなくなってしまっていた”

“この世界は。
誰もが、それぞれの場所で輝きながら生きている。
時には、関わり合う事によって互いを助け合う事もあれば、
譲り合ったりもしながら生きている物。
それが無くなってしまったら。

スムーズに生きて行く事はできなってしまう。
まるで、信号の無い交差点のように―”

「ある時、あるイベントが企画された。　そこには私を入れ、数人のスタイリストがエントリーされたの。　この時、思った。　当然、主役はこの私なんだとね。　…ところが。　後日出版された雑誌の見出しには―」

【　次代の新カリスマ！　今、最旬のスタイリストはこの人!!　】

“ー……目を疑ったわ”

“自分が。
この私こそが一番だと信じ切ってただけに、
その時の衝撃と怒りはそれこそ凄まじい物だった”

“…でもその後、それ以上の衝撃が待っていた。

それは…、

それまで自分に擦り寄っていた人間が、
途端にまるで潮が引くかのように
離れて行く光景を目の当たりにした事よ”

“浮き沈みの激しいこの世界。
それは、決して珍しい事じゃない。けれど…。
まさか、

『この私が』

って。

それまで有頂天だった私にとって、
それは死を宣告されるに等しい物だった”

“それまで、負け知らずだったのも災いだったのね。
たったのあの一文に計り知れないダメージを受けた私は、
それを境に徐々にスランプに陥った。
そんな私を見、周りの人間はますます離れて行って。

代わりとなる才能あるスタイリストなんて、幾らでもいる。
私にかまってる暇なんて無いってね”

“がむしゃらに。
ひたすら高みを目指し、
とにかく飛んで飛んで。

そうしてやがて見渡して見れば、
...そこには誰もいなかった。

皆が求めていたのは、
私と言う人間そのものじゃなく、うわべだけ。

本当に、
心から私を必要としてくれる人間は存在しなかったのか？

そんな疑問が、私の中に芽生え始めたの”

“ーそんな事を考え始めたら。
途轍もない不安だとか悲しみが次々に溢れ出し、
夜も眠れなくなって。

そうして私はさらに失速、
そのまま真っ逆さまに落ちて行った。
同じくして、メディアからも私の存在は薄れて行ったわ...”

“一…何もかも。
全てが偽りに見えた。

そして、この私自身の存在さえも”

“この街には。

こんなにも、大勢の人間達がひしめいていると言うのに”

“互いに心から求め合い、素の自分を見せ合える相手。
自分の半身とも呼べる、
そんなもう一人の自分のような存在に。

ただの一人にとて、
出会う事すら出来ないだなんてー...”

“遠目に見る街はただ明るいだけで、
どこか冷たい感じがした。

自分の生まれ育って来た街なはずなのに、
居場所が無い気がした。

もちろん両親のいる実家はあるけれど、
今さらこんな私が戻っても迷惑だろうって。

ただでさえ、しょうもない息子だってのに”

“ーあの橋を、
かつて息巻いて渡って行ったのは誰だったろう？
やがて、こうして
光の届かぬ暗がりの橋下から見上げる事になるなんて、
あの時には夢にも思いやしなかった”

“本当に、儚い夢を見ていたような気持ちだった。
あの日の事も含めてこれまでの全ては、
落ち果てた自分にはどれもが幻に感じられた”

“…これからどうする？

私を捨てたこの街が、
再び自分を必要としてくれるようにも思えず。
かと言って、実家に帰って泣き付く訳にも行かない。

もう、このまま果てしなく落ちて行くんだろうか？

誰にも求められず、
居場所も無いままに…”

“ここにはもういられない。

この街には、もう私の居場所は無い。

そう、強く感じた”

“けれど、ここを出た所であてがある訳じゃなかった。
よその地の知人を頼るにしても、
こんな落ちぶれた自分など相手にしてくれないだろう。

いずれも、
かの栄光があってこその繋がりに過ぎなかっただろうから
…なんて、そう思っただけで。

失態の上塗りをするかような、
そんな行動に出る気にも到底なれなかった。”

“今のこの、
名も無い落ちぶれた私を受け入れてくれる場所が。

…この海の向こうの何処かに、あったりするのだろうか？”

“かつての煌びやかな翼を失い、
地に落ちたこんな醜い私でも
温かく迎えてくれるような。

願わくば、
もう一度故郷と呼べるようなそんな安らかな場所が、
果たしてあると言うのだろうかー...”

【元カリスマ・スタイリスト、ロニー・ハーディング氏、失踪かー】

「ー…気付いたら、街を飛び出してた。　何もかもどうでも良くなって、アテも無しにフラフラしてたら、いつしかここに流れ着いてたわ。　復帰なんて、自分にはもう無理。　そのまま人知れず消えてしまおうなんて思っていたけど。　最終的に、この地で私は救われて…」

「この地…ヒドゥン・スプリングズには、奇跡の魔法が存在するって伝説が語り継がれているけど、私は信じるわ。　だって、こうして再び空高く舞い上がる事ができたんだもの」

「絶望と思えたあの事件も、今じゃ感謝を感じてる。　辛かったけど、あの事があったお陰で、私は人としての心と自分の原点を取り戻す事ができた。　そして、お金じゃ買えない大切な物も手に入れた。　それらを2度と忘れてはならないとの誓いから、この写真を置いてるのよ。　…私のライフワーク。　プライベートサロンのある、このフロアにね」

ユージン：「一最高じゃん。　っつーか、さすがじゃんよ!!　むしろ、人間臭くて安心したぜ」

ユージン：「もしこれで、それこそ絵に描いたような完全無敵セレブスターだったりしたら。お互いに、今こんなトモダチなんざしてる訳ねぇだろうぜ。　何より完璧すぎる人生なんざ、つまんねー事この上無いだろうしよ！」

ロニー：「そうね。　本当、その通りだわ!!」

ハリー：「また、こんな所で何の悪巧みしてやがんだ？　そろそろ肉焼けっぞ」

ユージン：「チッ。　感動のシーンの邪魔すんじゃねーよ」

ロニー：「ヤダ！　うっかり話し込んじゃってたわ」

ハリー：「テメーのこった。　しょーもねー企みだろ、どーせ」

ユージン：「そうそう。　どうすりゃ、テメーがこっぱ微塵になるかってな」

ロニー：「まぁ２人共、続きは乾杯してからにしましょ」

ハリー：「さっ、肉肉！　ガンガン食うぜ!!」

ユージン：「エラソーに言ってんじゃねーよ！　カイルのレンタル料は、キッチリ払ってもらうかんな」

ロニー：「あら。　じゃ、ワインもっと買っとけば良かったわ！」

カイル：「お待たせ！　冷めないうちにどうぞ」

ハリー：「っしゃー、いただきィ!!」

ユージン：「ヒュ～♪　ニクニクー☆」

ロニー：「最ッ高の匂いね！　まさに、5つ星級だわ!!」

カイル：「今日は呼んでくれてありがとう！　お礼と次の仕事の成功を願って、この後のデザートにはロニーの好物のフレンチトーストを用意するよ。　昨日思いついた、新作レシピなんだ。　気に入ってもらえると嬉しいんだけど」

ロニー：「本当**!!?**　ヤダもう、嬉しいッ**!!!**」

ロニー：「やっぱ、カイル君の料理が最高**!!!**　ブリッジ・ポート時代、足繁く通ってたお店はあったけど。　今思うと、あのお店は何だったのかしら」

カイル：「ロニーってば。　フレンチトースト発言で、すっかりハイになっちゃってない？」

ロニー：「あら、本当よ**!!**」

ハリー：「マジか**!?**　じゃ、今度のギャラでカイル買え！　何としても、うちの専属料理人に**...**」

ユージン：「テメ、さっきから一人調子こいてんじゃねぇ！　ブッ殺すぞ!!」

ハリー：「褒めてるだけだろが！　そっちこそ、警官のクセして殺すとか言ってんじゃねぇ！　今ここで吊るすぞ、マジで!!」

カイル：「コワッ！　ここが、噂のブラック企業ってヤツか。　やめとこ」

ロニー：「えッ!?　ちょっとソコ！　そのへんにしときなさいよ!!」

ロニー：「ユージン、仕事の方はどう？　私の道楽業と違って、いつも大変ね」

ユージン：「そりゃまぁ…、それなりにな。　でも、自分がなりたくてなった仕事だし。　後悔はねぇよ」

ハリー：「それが一番だよな。　せっかく生まれて来たからにゃ、自分の夢で勝負してぇよな」

カイル：「いつから、写真やジャーナリズムに興味持ったの？　何かきっかけがあった訳？」

ハリー：「あー、中学くらいからかな。　元々、好奇心とか強かったし。　学校新聞とか、結構気合入れて作ってたっけなぁ。　何か、スゲー面白かったの覚えてる」

ユージン：「そう、思い出した！　確か、当時俺も学校新聞の資料集め手伝わされたんよ。　取りあえず、コイツの言う通りに付いてったは良いけど。　見たらそこ、バスケ部の女子更衣室でよ！」

カイル：「ぇえ！　ひょっとしてそれ、モロ盗撮じゃん**!?**」

ユージン：「コイツ、俺をダシにするつもりだったんよ。　万一見つかった時、俺を主犯に仕立て上げる為の計画っつーかで」

ハリー：「バ、バッカ！　そんなんじゃねーっつってんだろ！」

カイル：「で、で？　結局どうなった訳**!?**」

ハリー：「…結局、何も撮らずに終わったんだよな。　その日は、ちょうど遠征試合に行ってて誰もいなかったってオチでさ。　あれでもし普通にいたら、激写できたかもしれねーって今も悔やまれてなんねぇぜ」

ユージン：「そ。　あと一歩のツメが甘いんだよな。　テメーは」

カイル：「へぇ～。　今のやり手っぷりからは、想像できない失態だね」

ハリー：「そう！　この俺の、今思い出しても悔やまれてならない黒歴史だ」

ユージン：「そんなマヌケが、今じゃプロのジャーナリストだってんだからな。　つくづく、世の不条理さを感じるぜ」

ハリー：「んなコト言ったら、テメーもそうだろ。　当時なんざイタズラ三昧で、近所中からトルネードの異名取ってやがったじゃねーか」

ユージン：「昔の話じゃんよ！　今はこの通り、エリート警官…」

ハリー：「その方が、不条理極まりねぇっつーの！」

カイル：「まー、人生どこでどう変わるか分からないってヤツだね」

『あの…』

『おたく、ひょっとしてロニー・ハーディングさんじゃないスか？　スタイリストの』

『ー…誰？』

『あっ…と、スイマセン。　俺、一応ジャーナリストなんスよ。　フリーの』

（…記者、ね。　【あの人は今】的なネタって所かしら。　それとも、こんな私でも、田舎じゃ特ダネになるのかもしれないわね。　ま、どっちにしろ、今の私にとっちゃどうでも…）

『わざわざ、こんな所まで追いかけて来たっての？　良いネタ取れて、良かったわね』

『あ。　いや別に、取材するつもりで声掛けたんじゃ無いんで』

『ネタなら、何でも良い訳じゃないスよ。　俺も生活掛かってるし、売れるネタ取ってこそナンボなんで。　今のロニーさん撮っても、金になる程の良い記事書けそうにないし。　こんなんでも、一応仕事は選んでるもんで』

（なっ…、何コイツ!!?　幾ら私が落ち目にしたって、無礼にも程があるわ!!!）

『**…**アンタ。　ケンカ売ってんの**!!!?**』

『と、とんでもありません！　俺が伝えたかったのは、今のそんな覇気の無い貴方に対して、取材してやろうなんて気はとても起きないって意味で**…**』

『良くも悪くもオーラがみなぎってる人なら、こっちの攻撃も受け入れられるか跳ね返すかできるだろうけど。　今の心身共に弱り切ったロニーさんじゃ、フラッシュの一つも焚いたら消え飛びそうな感じがして。　そこまでできるほど俺、非道にゃなり切れないモンで』

（……悔しいけど、核心付いてる。　ムカつくけど、反論できない…）

『ところでロニーさん。　この街は初めてっスか？』

『だったら、何**!?**』

『メドウ・ビーチの方とかは、行きました？』

『メドウ・ビーチ？』

『奇跡と魔法の伝承が、現在も数多の人々によって語り継がれる、ここヒドゥン・スプリングズの地における、最強のパワースポットって言われてる場所なんスよ。　信じる信じない抜きにしても、一見の価値は十二分にある場所でー…』

『ここに来たなら、絶対見なきゃ！　ましてやスタイリストってんなら、なおの事。　俺、案内するんで。　ほら、コッチ来て！』

『え！　ちょ、ちょっと!!?』

『さっきから、何なのアンタ!!　人を振り回すのも、いい加減にしなさいよ!!!』

『そう言いつつ、ちゃんとノッてくれてるじゃないスか』

『！　そ、それは…』

『！　って言うかッ！　ショボかったら、タダじゃ済まないわよ!!』

『あ、ソコは大丈夫ッス。　絶対に』

『ー……!!!!』

（……何て、綺麗なー…）

（この世界に、こんな鮮やかな色彩があっただなんて……）

『ね。　言った通りでしょ？』

『もっとも、俺みたいのが一流スタイリストの貴方に対して、美がどうだなんて言えたモンじゃないけど』

『純粋に、綺麗とか凄いって言う物には、理屈やら説明やらは必要無いと思うんスよね。　でも、貴方はその美を生業としてる人。　俺のような凡人とは違う感性や知識、それに技を付け高めて来た人だ』

『それだけに。　その努力や栄光の代償とも言えるような、一般人には分からない辛さなんかも抱えたりしたんでしょ。　でなきゃ、こうはなったりしない。　だけど、貴方も1人の人間。　もう耐えられないって叫びたくもなれば、何もかも投げ出してしまいたくもなる。　そう言う時や感情は誰にでもあるし、決して恥ずかしい事なんかでも無い。　ってかむしろ、それでこそ人間である事の証みたいな物じゃないスか』

『自分を責め、潰してしまう前に。　もう一度、素の自分を見つめ直してみると良いっスよ。この街にいられないんなら、またどっか違う地に移るも一興。　でも、もしも何か感じる物みたいのがあったと言うのなら―』

『また、いつでも戻って来れば良いっスよ。　この地の空気や輝きは…、いつだって変わる事無く、何度でも貴方を迎え入れてくれるはず』

『だから。　あんま悲観し過ぎずに、も一回やってみましょうよ。　いつか立ち直った時。　それこそ俺らが、死に物狂いで追っかけ回すくらいのドでかい事、また一発やらかして見せて下さいよ。　人の持つ輝きなんてのは、どこにいようと決して失われる事はありません』

『大丈夫ッスよ、ロニーさん。　貴方なら絶対出来る!!!　事実、今日までそれを証明して生きてきた、世界に二人とない素晴らしい人間なんですからー…』

Another Days

http://p.booklog.jp/book/95114

★　【My Lonely Town】　元作作成・mixiページUP年月日　2013.7.29

著者：Aymic
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/aymic1973/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/95114

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/95114

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ